

平成21年 6月 17日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19730500
 研究課題名（和文） デューイ実験学校における学部学生・大学院生のアシスタント活動による教職専門職教育
 研究課題名（英文） Education for Teaching Professionals: Undergraduate and Graduate Teaching Assistants at Dewey's Laboratory School.
 研究代表者
 伊藤 敦美（ITO ATSUMI）
 敬和学園大学・人文学部・准教授
 研究者番号：80387315

研究成果の概要：学生アシスタント制度の導入には、大学での学問研究を現実の学校教育場面において実感を伴って理解させること、学生たちに子どもの心の有り様を実感させることによって「何を教えるのか」と「いかに教えるのか」の分離を克服し、理論と実践とを統合するという意義があった。今日の大学・大学院の教職課程においても、積極的に理論と実践との統合を目指すこと、そのために受講生の教育に関する経験に応じて授業や学校支援活動の形態を考慮することの重要性が示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	150,000	1,850,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：教育学，デューイ実験学校，アシスタント活動，教職専門職教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 学校支援活動や学校へのインターンシップ導入に各大学が積極的に取り組み始めたのは近年のことであるため、現在、多くの大学が制度の運用について試行錯誤の段階であり、教職課程の授業とインターンシップ及び学校支援ボランティアなどの学校支援活動を通しての教職専門職教育の在り方についての理論枠組みが構築されるまでには至

っていないことから 1896～1904 年の間に既に 70 名のアシスタントを要していたジョン・デューイ実験学校におけるシカゴ大学の学部学生・大学院生のアシスタント活動について教職専門職教育の観点から検討することとした。

(2) デューイ実験学校に関する研究は、1990年代に入ってシカゴ大学の「大学広報」や「実験学校ワークレポート」などの第1次資料が

再発見されたことを契機に、我国においてもデューイの諸著作をもとにした従来の研究に加えて、再発見された第1次資料を用いた同校のカリキュラム、指導法等の研究が行われるようになった。しかしながら、同校のアシスタントの役割や意義の解明及びアシスタント活動についてデューイの教育学構想における教職専門職教育との関連で論究することは未着手の課題であった。

2. 研究の目的

19世紀末にシカゴに設立されたジョン・デューイ実験学校における学校支援活動者としてのアシスタントの活動を通しての教職専門職教育について検討することによって、こんにちの教職課程における授業とインターンシップ及び学校支援ボランティアなどの学校支援活動を通しての教職専門職教育の在り方についての知見を得るために、次の(1)～(5)の目的で研究を実施した。

(1)デューイによって設立された当初(1896～1904年度)の実験学校における学部学生・大学院生のアシスタントの意義と役割について調査分析すること。

(2)デューイ実験学校でアシスタントを行っていた学部学生・大学院生が受講していたシカゴ大学教育学科の授業科目及び彼らが執筆した学位論文について調査分析すること。

(3)デューイの教育学構想について教職専門職教育の観点から分析検討すること。

(4)現代のジョン・デューイ実験学校におけるアシスタントについて調査すること。

(5)(1)～(4)の調査分析によって得られた知見から、こんにちの大学・大学院の教職課程における授業とインターンシップ及び学校支援ボランティアなどの学校支援活動を通しての教職専門職教育の在り方や展開の可能性を明らかにすること。

3. 研究の方法

(1)シカゴ大学レグンステイン図書館において『シカゴ大学年次記録』、「実験学校ワークリポート」を収集し、デューイ実験学校における教育実践において学部学生・大学院生のアシスタントが果たしていた役割と意義を明らかにする。

(2)デューイ実験学校でアシスタント活動を行っていた学部学生・大学院生の学業成績証明書の情報を基にして、彼らが履修していた授業について調査を行う。『シカゴ大学年次記録』及び彼らの学位論文を調査する。

(3)デューイの教師・教員養成に関する著書・論文にあたり、彼の教育学構想における教職専門職について明らかにする。

(4)現在のシカゴ大学実験学校を訪問し、教員組織及びアシスタントについて調査する。

(5)(1)～(4)の研究から得られた知見を基に

して、こんにちの大学・大学院の教職課程における授業とインターンシップ及び学校支援ボランティアなどの学校支援活動を通しての教職専門職教育の在り方や展開可能性について理論枠組みを構築する。

4. 研究成果

(1)学部学生・大学院生のアシスタントの役割と意義

本研究において、デューイ実験学校開設当初から1904年までの間に活躍した65名のアシスタントのうち、20名がシカゴ大学の学部学生・大学院生であったことが明らかになった。

アシスタントの仕事内容は、『シカゴ大学年次記録』によれば、授業の一環としての「授業補助」及び「授業実施」、奨学金のための「授業実施」と位置づけられている。前者については、教育学科の授業に最初にアシスタントが位置づけられたのは実験学校の教員であるハマー(Althea Harmer, In the University Elementary School, Director of Domestic Economy)の1898年度の授業科目「小学校における家政科と科学」(Household Art and Science in Elementary)においてである。この授業科目の受講生は、1週間に5時間、小学校で扱う観点から調理や裁縫などの技術的なことを学ぶこと、実際のトレーニングと教育の目的や方法の関係の議論を学生と共にすること、及び実験学校で1週間に6時間、実際の家政科の授業観察やアシスタントを行うことが求められていた。後者については、1899年度に「6人から8人の優秀な、いくらかの教育経験がある学生は、1週間に5時間から8時間の実際の授業を行うことができ、大学の授業料となる奨学金が与えられる」という規定が設けられた。

加えて、1899-1900年度の「実験学校ワークリポート」にはアシスタントの役割について、「個々の子どもの観察の記録をつける」と記載されている。しかしながら、1900-1901年度は、分析の対象とした65名のアシスタントのうち10名が教員と同様の授業実践のレポートを書いている。この1900-1901年度のワークリポートからは、アシスタントは個々の子どもの観察の記録をつけるといった教員とアシスタントの仕事内容の違いを確認できる記述は発見できなかった。

したがって、デューイ実験学校におけるシカゴ大学の学生アシスタントの活動は、「授業実施」と「授業補助」2通りの活動形態があり、「授業実施」のアシスタント活動は、さらに、研究のため、実習のため、奨学金のための3つに分類できる。

さらに、デューイ実験学校の学校経営の観点からも学生アシスタントは重要な役割を担っていた。同校では、開校後「オールラウ

ンド教員」から「スペシャリスト教員」の方針へと変更し、児童生徒に最新の科学の成果や科学的なものの見方を習得させること、高度な技術を身につけさせることを目指していた。デューイは論文「教育学上の実験」(1896)において「当大学の大学院生たちが研究資料を提供する大部分となっているが、彼らは彼らの専門分野においてより重要で確実な諸事実を適用することに関心を持っている人たちである。そして、当小学校はこのような学生たちから教育の内容や方法に関して、そして実際の授業に関して、両面に対する方向付けをますます期待している」と述べ、高い専門性を備えた受講生がデューイ実験学校においてその専門性を発揮することを求めている。教育を専門としている受講生に加えて、「死後硬直における電解質の効果」(“The Effect of Electrolytes on Rigor Mortis”)の論文で博士号を取得した大学院生や、「18世紀イギリス文学におけるゴシック主義」(“Gothicism in Eighteenth Century English Literature”)を学位論文のタイトルに設定している大学院生もアシスタントとして活動していた。このことから、デューイのねらい通り、彼らのような学生によっても大学における最新研究の成果が実験学校にもたらされていたといえる。また、小柳(2002)によれば、実験学校は発足当初から深刻な財政問題を抱えていた。シカゴ大学当局は実験学校を正規の施設として認めないながら運営費用について何らの保証もしていなかったことから、同校は常に運営資金不足の状態であったという。したがって、学生によるアシスタント活動は財政難による教員不足を補う目的もあったと考えられる。

つまり、学部学生・大学院生のアシスタント活動は、①授業実施及び教員の補助、②最新の研究成果の実験学校への導入、③財政難による教員不足対策の役割を担っていた。

(2)アシスタント活動を行った学部学生・大学院生のシカゴ大学における履修科目及び学位論文

シカゴ大学教育学科においては、デューイ実験学校の大学助言者のみではなく、実験学校の教員たちも授業科目を担当していた。また、教育学科の授業科目には、受講生の教育に関する経験に応じて、授業観察、アシスタント、実習が多く求められる場合と理論の学習に重点が置かれる場合の2通りの授業形態を持つものがあつた。

実験学校でアシスタントを行うシカゴ大学の学生たちは、1900年度から実験学校の教員及び大学助言者の担当する授業科目の受講を義務づけられた。例えば、「実験教育学」「小学校教育：一般原理」「小学校教育：歴史」「小学校教育：科学」「家庭科の教育的価

値と効用」といった授業科目である。デューイは論文「大学の教科としての教育学」(1896)において、教育学の指導について「教室での理論が実際の学校活動と平行する程度に比例して効果的なもの」となり、「学生は講義や教科書で示されたものの真意を理解することができる」し「教室で教えることが、あいまいで実行できないものではないという保証になりうる」と主張し、この主張から「理論と実践とは、常に結合していかなければならない」と結論づけている。ただし、大学における実習は個々の生徒に対するかわりよりも、むしろ吟味・立証される諸原理と深いかわりを持つという。

実際に、シカゴ大学教育学科の学生たちは、大学において実験学校の教員や大学助言者たちから実験学校における教育実践から得られた理論を学び、さらに、彼ら自身の教育経験に応じて授業観察や授業補助のアシスタント活動を行い、これらの学習の成果を活かした授業を実験学校において行っていた。両校における一連の学習や活動を通して、大学での理論と実験学校における実践との統合が実現していた。シカゴ大学教育学科とデューイ実験学校における教育実践を通して、理論と実践との統合を実現するための方策の一つとして両校の関係性を密にするための様々な取組がなされたが、その一つが実験学校にアシスタントを導入することであつた。

したがって、(1)に示した①から③の3つの役割に加えて、④シカゴ大学との密接な関係性の構築も重要なアシスタント活動の役割であるといえる。

(3)デューイの著書・論文におけるシカゴ時代の彼の教育学構想と教職専門職教育

シカゴ大学教育学科においてデューイは、教育学を高度な学問研究に従事する学問として確立し、教職を専門職として位置づけることを構想していたことから、同学科は師範学校及びカレッジの課題を克服する必要があつた。『学校と社会』(1899)において、デューイは、師範学校の課題は高度な学問的な教育内容から切り離されて孤立していることであり、カレッジの課題は家庭から離れている学生は子ども時代を忘れていたので、教材が教えられる側の子どもの心にどのように関連させるかについての知識を持っていないことであると捉えている。デューイは、この両者の課題について、「何を教えるべきかと、いかに教えるべきかについてのあいだには、このような分離があるので、師範学校とカレッジのいずれの側も、その隔離のために苦しんでいるのである」と双方の問題点について述べている。この隔離をなくすべく、デューイは、シカゴ大学教育学科及び実験学

校において教育実践の改革を目指した。したがって、師範学校における教員養成とは異なる教育学研究・教育とは、「いかに教えるべきか」と「何を教えるべきか」の乖離を打破する教育、すなわち、「理論と実践の統合を目指す教職教育」であるといえる。

シカゴ大学の学生アシスタントをデューイ実験学校に導入した背景にも、教育学を高度な学問研究に従事する学問として確立し、教職を専門職として位置づけるという教育学構想及び理論と実践の統合を目指す教職教育というデューイの教職教育の構想があったのである。

(4) 現代のシカゴ大学実験学校における教職員の構成とアシスタントの役割

現代のシカゴ大学実験学校は、幼稚園 (Nursery, Kindergarten)、小学校 (Lower School)、中学校 (Middle School)、高等学校 (High School) から成っている。小学校は 4 学年 (grade) から成っており、6 歳から 10 歳が対象である。各学年は 5 クラスで、1 クラスは 22 人から 23 人である。このうち、1 学年、2 学年には 1 クラスずつ、2 学年混成クラスが設けられている。教員組織は、各学年のホームルーム担当教員 (算数、国語、社会担当。1、2 学年は科学も担当する)、1、2 学年のアシスタント教員、特別教科担当教員 (科学、音楽、美術、図書室、体育、外国語、コンピューター)、カウンセラー、ラーニング・コンサルタント、ラーニング・スペシャリストから編成されている。現在の実験学校におけるアシスタントは、有給で、1、2 学年の担任を補助する役割を担っており、同校設立当初の学部学生・大学院生のようなアシスタントとは異なる位置づけである。アシスタントから実験学校の教員に採用される場合もある。

(5) こんにちの大学・大学院の教職課程における授業とインターンシップ及び学校支援ボランティアなどの学校支援活動を通しての教職専門職教育の在り方や展開可能性

デューイ実験学校における学部学生・大学院生のアシスタント制度の導入には、大学での学問研究を現実の学校教育場面で実感を伴って理解すること、そして、学生たちに子どもたちの心の有り様を実感させることによって、「何を教えるか」と「いかにして教えるか」の分離を克服し、理論と実践とを統合をする機会となるという意義があった。そして、本研究では、一人の事例ではあるが、シカゴ大学教育学科修了後に教職専門職として活躍した卒業生の存在を確認することができた。さらに、このアシスタント制度の導入は、シカゴ大学の学生にとってのみではなく、デューイ実験学校にとっても、大学生

がアシスタント活動を行うことによって一人ひとりの子どもたちの教育を充実させることや、最新の研究の成果を学校に取り入れることができるという利点があった。シカゴ大学の学生にとっては、理論と実践との統合の機会となることに加えて、奨学金を得る機会にもなっていた。

実践的指導力の育成が必須の課題として位置づけられているこんにちの大学・大学院の教職課程においても、積極的にインターンシップ及び学校支援ボランティア等の学校支援活動を導入することが必要であることは言うまでもない。しかしながら、教育学を高度な学問研究に従事する学問として確立し、教職を専門職として位置づけるというデューイの教育学構想の観点からは、活動のみを充実させることだけでは十分であるとは言いがたい。大学の授業における理論とインターンシップなどの学校支援ボランティアにおける実践とを統合するための指導・支援及び機会が必要であるし、学生の教育経験に応じて体験的な実習の機会を増減する必要性もある。教職専門職大学院で学ぶ現職教員は十分な教育経験を有しているはずであるから、専門的な理論と実際的な経験を統合する研究を進めることが重要であろうし、教育経験の少ない学生にとっては理論的な学習と同時に実際的な経験を重ねることも必要であろう。さらに、専門的な理論と実際的な経験を統合するための基盤となる学校間の連携及び教員間の連携も必要不可欠である。

(6) 今後の展開

本研究において、デューイ実験学校の教員、シカゴ大学の教員、学部学生・大学院生のアシスタントといった関係者の動きの観点から、シカゴ大学教育学科とデューイ実験学校において理論と実践とを積極的に関連付けることによって教職専門職教育を実践していたことを実証した。理論と実践の二元的対立こそ教職の主要な悪弊の一つであると考えていたデューイの理論と実践の二元論克服の試みの一つがこの両校の連携による教育実践であったと考えられる。平成 20 年度から我国に設置された教職大学院において、理論と実践との融合を意識した新しい教育方法の積極的な開発・導入が視野に入れていることから、教職教育における理論と実践の関係を明確化し、両者の統合を図る教育実践モデルを作成することは必須の研究課題であるといえる。そこで、今後は具体的な実践事例を取り上げて、デューイ実験学校とシカゴ大学教育学科の連携の観点から、デューイ教育学構想及び教職専門職教育論と両校の教育実践における理論と実践の関係を解明することを、新たな研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 伊藤敦美、デューイ教育学構想と実験学校におけるアシスタント活動、敬和学園大学研究紀要、第18号、107-123頁、2009年、査読無。
- ② 伊藤敦美、現代シカゴ大学実験学校のカリキュラムーリーディングのカリキュラムを中心にしてー、敬和学園大学研究紀要、第17号、251-266頁、2008年、査読無。

〔学会発表〕(計3件)

- ① 伊藤敦美、デューイ教育学構想における理論と実践の関係ーシカゴ大学の学部学生・大学院生のアシスタント活動の観点からー、日本デューイ学会第52回大会、

2008年10月13日、筑波大学東京キャンパス。

- ② 伊藤敦美、デューイ実験学校と連携したシカゴ大学教育学科のカリキュラムー学部学生・大学院生のアシスタント活動に焦点をあててー、日本カリキュラム学会第19回大会、2008年7月5日、鳴門教育大学。
- ③ 伊藤敦美、デューイ実験学校における学部学生・大学院生のアシスタント活動、日本デューイ学会第51回大会、2007年10月20日、奈良女子大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 敦美 (ITO ATSUMI)

敬和学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：80387315